



写真1 ギョムのムスタファー国際大学イマーム・ホメイニー・カレッジ

科学研究費補助金（基盤研究B）事業

中東・アジアのイスラーム系宗教大学の留学生獲得戦略——知のグローバル化とローカル化

西村 淳一

早稲田大学イスラーム地域研究機構
主任研究員

一 事業の概要

早稲田大学イスラーム地域研究機構は、二〇一二年四月より研究活動の一部を、桜井啓子機構長が研究代表をつとめる科学研究費補助金（基盤研究B）事業「中東・アジアのイスラーム系宗教大学の留学生獲得戦略——知のグローバル化とローカル化」（以下「科研事業」と略記）との共催で実施している。この科研事業の狙いは、留学生の受け入れや海外展開を通じて次世代ムスリムの育成に多大な影響力をもっているイスラーム系宗教大学に着目し、「知」の伝播と受容、変容という側面から、現代的なイスラームの知の全体像を描き出すことにある。

イスラームの知は、人々の生活習慣を律すると同時に、政治のあり方をも規定する。現代においては、国際的に知名度の高いいくつかのイスラーム系宗教大学が発信する知は、世界各地から集められた留学生を通じて、彼らの出身地に伝達されている。留学生の持ち帰った知は、新しい知として受容され、新たな運動を引き起こすこ

ともあれば、地元に根付いた知と相容れずに対立を引き起こす場合もあるが、時間の経過とともに、地元に適応したものになっていく傾向にある。ここにイスラームの知の《グローバル化》と《ローカル化》という二つの現象を見出すことができる。このような現象に関して総合的な見地から共同で研究が行われたことは未だなく、本科研究事業がその初の試みとなる。

より具体的な目標は、

（一）現代イスラーム世界におけるウラマー（イスラームの学者）養成の最高学府であるアズハル大学（エジプト）、マディーナ・イスラーム大学（サウジアラビア）、ムスタファー国際大学（イラン）など、イスラーム系宗教大学の留学生獲得戦略の分析を通じてイスラームの知のグローバル化の過程を解明すること

（二）留学生の送り出し国（パキスタン、バングラデシュ、ウズベキスタン、マレーシア、インドネシア、中国、米国等）での現地調査を通じて、留学生たちが持ち帰った知が、時を経てローカル化されていく様相を明らかにすること

（三）史資料の検討を通じて、現代のイスラーム系宗教大学と、その前身である前近代のウラマー養成機関（マドラサ）のカリキュラム、教授方法、学生の地域性などに関する相違を明らかにすること

本科研究事業は、二〇一二年四月に開始され、二〇一六年三月まで継続される予定である。以下では本事業の一環として



写真3 オックスフォード会議の会場 (2012年8月27日開催)



写真2 オックスフォード会議の会場 (2012年8月27日開催)

二〇一二年中に開催された二回の研究会と、オックスフォード大学で開催された国際会議について、開催日の早いものから順に報告する。

二 第一回研究会

二〇一二年七月二十七日、早稲田大学二〇一〇一号館二〇一会議室にて開催された第一回研究会では、オックスフォード大学国際開発学部・E SRC 研究員のマスーダ・バノ氏により「パキスタン、ナイジェリア、シリアにおける女性によるイスラーム運動―その登場と拡大の背景」と題した報告が行われた。同氏はイスラーム地域におけるNGO、宗教と開発、マドラサ、イスラーム運動などのテーマで精力的に執筆活動を行っている新進気鋭のパキスタン人研究者であり、研究協力者として本科研事業に加わっている。本報告では、上述の三カ国で実施した実地調査をもとに、豊富な写真資料を提示しつつ、女性によるイスラーム運動の登場と拡大について具体的に説明した。なお、翌七月二十八日には、大阪府豊中市千里朝日阪急ビル一四階三号会議室にて、科研事業の一環として同氏による別の報告「マドラサと好戦性?―パキスタンにおけるジハードのための人員募集について」も行われた。

三 オックスフォード国際会議

二〇一二年八月二十七日、二十八日の二日間、オックスフォード大学との共催により、同大学国際開発学部において、国際会議「教学教育機関とムスリム社会の変化―アズハル大学、マディーナ大学、ムスタファー大学がもつ世界規模の影響力」が開催された。

第一日目は、冒頭にコディネイターであるマスーダ・バノ氏（上掲）と桜井啓子氏が本会議の趣旨を説明した後、以下の三つの報告が行われた。なお、各発表につき一名のコメンテーターが批評を加えた。

(一) マイク・ファーカー（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）・博士候補生）「神聖なる土地、奨学金制度、そして地球規模でのサラフィー主義伝道―一九六一年設立のマディーナ・イスラーム大学」

サウジアラビア政府が支援し、全学生の八五%が留学生のマディーナ・イスラーム大学について、実地調査、関係者へのインタビュー、様々な文字資料などを基に、その沿革と教学の特徴が詳細に報告された。本発表に対しては、ステファン・ラクロワ氏（シアンスポ Sciences Po・准教授）がコメントをした。

(二) 桜井啓子「シーア派教学の中心としてのコムの形成―ムスタファー国際大学」ムスタファー国際大学設立（二〇〇八

年）の目的と歴史的背景、およびその教学の特徴が説明され、世界各国に支部を設置して多くの留学生を受け入れている理由、また全世界のムスリム社会にとって同大学が出現したことの意味や影響などについて検討が加えられた。本発表に対しては、リズヴィ・サッジャード氏（エクスター大学・准教授）がコメントをした。

(三) イルファナ・ハシミ（ニューヨーク大学・博士候補生）「リワーク・システムに見るアズハルの多様性」

一六―一七世紀のアズハルに見られる「リワーク」と呼ばれる一種の同郷団システムについて検討が加えられ、ウラマーの民族アイデンティティのあり様について、またそれが地理的にどの程度の拡がりを持っていたのかという点や、それが政治権力とどのような関わりを持っていたのかという点などが報告された。本発表に対しては、ヒラリー・カムバッチ氏（オックスフォード大学・フェロー）がコメントをした。

続く第二日目には、さらに以下の三つの報告が行われた。

(四) アレックス・サーストン（ノースウェスタン大学・博士候補生）「ナイジェリア北部の「アフルッスンナ」―カノとマディーナを往復する伝道ネットワーク」

ナイジェリア北部カノのイスラーム伝道者集団「アフルッスンナ」について、伝道者のほぼ半数がマディーナ・イスラーム大学の卒業生であることが指摘され、代表的な二人の伝道者がカノ社会の中で評判を得ていく過程と背景が説明された。本発表に

対しては、マスーダ・バノ氏（前掲）がコメントをした。

（五）アン・ワイトウルスキー（フロリダ大学・博士候補生）「二〇世紀モロッコにおけるアズハル、サラフィー主義、モロッコ民族主義運動の三者関係が公教育政策に与えた影響」

一九世紀後半～二〇世紀初頭のモロッコにおけるアズハル卒業業者によるサラフィー主義の導入、その後の同地でのサラフィー主義の影響、同地における政治改革運動とアズハルによる支援、モロッコ民族主義運動の指導者アッラル・ファースイーとアズハルとの関係、などの点が報告された。本発表に対しては、ステファン・ラクロワ氏（前掲）がコメントをした。

（六）塩崎悠輝（同志社大学・助教）「東南アジアのムスリム諸国におけるイスラーム教学の中心と公的ファトワの変遷」

二〇世紀初頭、東南アジアのムスリムの主要留学先がメッカからカイロへ移ったこと、それに伴って同地域にはサラフィー主義に傾倒したウラマーが増えていったこと、そして彼らが国家との関係を強めていったこと、などが報告された。本発表に対しては、桜井啓子氏がコメントをした。

最後に参加者全員で総合討論を行った後、今後の共同研究の方針を確認して二日間に亘る会議を締めくくった。

会議は、報告者とコメントーターとして一二名の専門家の参加を得て、「教学教育機関とムスリム社会の変化」という未開拓のテーマについて専門的な議論を積み重ね

ることができた。参加者の国籍はイギリス、フランス、アメリカ、パキスタン、日本の五か国におよび、国際会議と呼ぶにふさわしい構成であった。また発表者全員が事前にフルペーパーを提出し、コメントーターに送付していたために、質疑応答を含め、深く議論をすることができ、非常に実のある会議となった。この会議の内容は、編集のうえ出版される予定である。

四 第二回研究会

二〇一二年九月二十九日、早稲田大学一二〇一号館二〇一会議室にて、第二回研究会が開催され、東南アジアにおけるアズハル留学に関する以下の二つの報告が行われた。一つ目は、京都大学イスラーム地域研究センター研究員の木下博子氏による「アズハル留学がもたらしたものーインドネシアにおける留学生ネットワークと社会的役割の諸相」と題する報告で、インドネシア人によるアズハル留学の歴史、現代インドネシアにおけるアズハル留学の概要とアズハル出身者の活動状況、「アズハル卒業業者世界機構インドネシア支部」の設立などの点が検討された。二つ目は、日本学術振興会特別研究員（上智大学）の久志本裕子氏による「アズハルの名のもとにーマレーシアにおけるウラマー養成の国家管理」と題する報告で、マレーシアにおける教育制度（特に宗教学校）の歴史と現状およびアズハルとの関係性、国家によるウラマー養成の管理などの点が論じられた。

五 今後の予定

現在、オックスフォード国際会議での報告原稿を取りまとめて出版する準備を進めている。二〇一三年度中に出版社を確定し、最終原稿を入稿することが目標である。

本科研事業では、二〇一三年以降も、平均年二回のペースで研究会を実施していく予定である。機構ホームページやイスラーム地域研究メーリングリストなどを通じて事前に告知を行うので、ご関心をお持ちの方にはぜひともご参加いただければ幸いである。



写真4 第2回研究会の様子（2012年9月29日開催）